題名　命のきょう界線

「だれのためのきょう界線」
四年　大竹美仁

クマやシカ、イノシシなどの野生動物が町に出ぼっする、というニュースを最近よく耳にします。ぼくの家の近くに野生動物が出ぼつしたらこわいなと思って聞いていました。

そんな時、今西乃子さんの「命のきょう界線」という本と出会いました。この本では、奈良県のシカは、観光客のマスコットとして大切にされて、一方では畑をあらす有がいじゅうとして、くじょされ続けている野生動物の「命のきょう界線」について向きあう人びとの話が書いてありました。そして、そのきょう界線は、ぼくたち人間の都合で生き物に対して引いてしまっているのではないかと思いました。

先日、トキを石川県のと半島に放すニュースが流れていました。トキや佐賀県白石町にもいるコウノトリは日本中どこにいても大切にほごされています。くじょされることはあ

りません。かれらに人間の引いた命のきょう界線はありません。

考えてみると、他にもさまざまな「命のきょう界線」があると思いました。昨年の夏、ぼくは、北海道の世界自然いさん「知床」を訪れました。そこにくらすヒグマは、世界いさんのエリア内なら大切に守られていますが、エリアを出て、人間の住む所に来るとくじょされてしまうこともあります。人のくらす所との見えないきょう界線がたしかにそこにはあるとはだで感じました。

また、ぼくの家の周りには、カナブンやカマキリがたくさんいます。ぼくは、それらをつかまえて水そうで飼育していますが、ぼくがかれらに水そうというきょう界線を引いてしまっていると思いました。

この本に出てくるきょう界線も知床のきょう界線も、ぼくが引いたきょう界線も、全て人間のかち観で決めたもので、対しょうとなった生き物が引いたり生き物がえら人だきょ

う界線ではありません。
保ごするだけでは、ふえすぎていつかトキやコウノトリをくじょするじょうれません。そうならないためには、自然を大切にして、生たい系のバランスを保つ努力が必要だと思いました。
この本を読んで、あらためて人間も自然の一部であり、自然かんきょうの中で生かされていることを考えることができました。今の地球上で人間が一番力を持っていると思いますす。もしかしたらおそろしい生き物かもしれないので、ぼく自身が生物多様性の一部だと思いながら、自然や食べ物を、そしてどんな生き物の命も大切にしようと思いました。